



Title	タンザニアの民族語・ボンデイ語のゆくえ : ボンデイの母語への意識変化
Author(s)	高村, 美也子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2021, 32, p. 55-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81407
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

タンザニアの民族語・ボンデイ語のゆくえ

— ボンデイの母語への意識変化 —

高村 美也子

0. はじめに

タンザニアの民族語の一つであるボンデイ語に焦点を当て、言語使用状況と復興への取り組みについて報告する。

著者はこれまで、タンザニア北東部に位置するボンデイ社会では、母語であるボンデイ語の使用が衰退していると報告してきた（高村 2005a,2005b）。それから 15 年ほど経ち、生活環境の変化により人々の意識に変化が起きてきた。近年、都市に住むボンデイの人々がボンデイ文化衰退に危機感を覚え、ボンデイ文化の保存・復興の取り組みを始めた。本稿では、ボンデイ語の使用状況と話者のボンデイ語に対する考えを報告し、その上で、ボンデイ語の復興に向けての動向を報告する。

1. 言語とアイデンティティ

言語の衰退問題は多くの国に存在し、各々の言語とアイデンティティとの関係について論じられている。例えば奥野は、シンガポールでは社会機能の円滑化および経済的発展のために英語が必要不可欠であったが、民族語離れが起こり、文化的アイデンティティの不安定化、ナショナル・アイデンティティの脆弱化が懸念されていると報告している（奥野 2006）。中国に関して孫は、中国の民族語は文化の媒体、情報の媒体、自然世界を認知知覚するシステム、象徴的アイデンティティであると論じている（孫 2010）。世界の衰退化している言語の状況についてブラッドリーは、「言語はいつでもグループのアイデンティティのもっとも中心的な部分であるわけではない。しかし、コミュニティの歴史や文学、口承文芸などはその言語を通して表現されるものであり、言語の喪失は後におしまれることになる」（ブラッドリー 2010）と論じている。また一方で、ブラッドリーは、「言語が絶滅したと言われていたが、コミュニティが存続し、いつか復活させたいと思うのであれば、話されなくなった言語を眠っていると見なすことができる」（Bradley2010:157）とも述べており、休眠状態の言語の存在も示唆している。日本においては、1997 年にアイヌ文化振興

法が成立し、2019 年 4 月にはアイヌ民族支援法が成立し、アイヌが先住民族として国に認められ、アイヌ語の言語、文化の振興と普及が活発化されている（公益財団法人アイヌ民族文化財団）。

このように、各国で専門家たちが民族語の衰退を懸念し、政府および自治体レベルで民族語の復興活動を行い、言語だけではなく文化の見直しも行われている。

2. ボンデイの概要

2.1. ボンデイ語

ボンデイ語 (kibondei) は、ニジェール・コンゴ語族、ベヌエ・コンゴ語群、バンツー諸語、シャンバラの G24 に属し (Ethnologue Language of Tanzania)、ボンデイの人々が話す言語である。

主な話者の居住地域は、タンザニア北東部タンガ州のムヘザ県である。ムヘザ県の人口は、2012 年の国勢調査 (The United Republic of Tanzania 2013) によると、202,229 人である。タンザニア全土の人口 47,422,000 人の 0.4% の人口割合となる。ただし、居住者の人数であるため、ボンデイ以外の民族も含まれている。また、地方に居住しているボンデイの人々も多くいるため、実際のボンデイ語話者人数は把握できない。

ボンデイ居住地域近郊には、サンバーおよびジグアの人々が存在する。各々、民族語であるサンバー語 (kishambaa) とジグア語 (kizigua) を使用している。このボンデイを含めた 3 民族は、もともとセウタ (Seuta) という共通の祖先をもつと言われている (Nkondokaya 2003)。サンバー語とジグア語は、70% 以上の割合でボンデイ語と類似性をもつと言われており (高村 2005a, b, 2006)、各々が各自の言語を使用しても理解できると言われている。

ボンデイ語は正書法が確立していない。そのため、発話者の音に相応するアルファベットで文字化を試みることができるが、人により綴りが異なっている。また、1882 年にキリスト教牧師 ウッドワードがボンデイ語の語彙集 *Collections for a Handbook of the Bondei Language* を出版している (Woodward 1882)。しかし、多くの語彙がサンバー語になってしまっていた。それから 126 年後の 2008 年に言語学者キアングが、ボンデイ語の語彙集 *Kibondei: Msamiati wa Kibondei - Kiswahili - Kingereza* をダルエスサラーム大学のスワヒリ語科から出版した (Kiango 2008)。しかし、村に居住のボンデイ語話者にまで当著書が知られていないのが実情である。

2.2. ボンデイの社会環境

ボンデイ語話者であるボンデイが多く居住する農村は、タンガ州ムヘザ県の MK 村である。当地域近辺ではアラブ・ペルシア商人が長期にわたり駐在し、その影響から地元住民の文化と融合してスワヒリ文化が成立した地域の一つである。

生業は主に農業であり、主な換金作物はココナッツとオレンジである（高村 2013）。アラブ・ペルシア商人たちがココヤシのプランテーションをボンデイ居住地周辺に導入させ、ココヤシ栽培にまつわる商売が盛んに行われてきた。ただし、近年はオレンジ栽培が導入され、オレンジ栽培が主流になりつつある。

宗教面では、アラブ・ペルシア商人の滞在によりイスラームの影響を受けてきた。1800 年代後半になると、アングリカン教会のイギリス人宣教師が MK 村に居住し、教会が 1884 年に建設された。ボンデイ社会では、人びとは土着宗教を信仰してきたが、これらの外来宗教が導入されて以来イスラーム、キリスト教の両宗教が農村に浸透した（高村 2013）。長老によると、ボンデイの人々は土着の信仰を継続しながら、ほとんどの村民がイスラームを受け入れ、その後、1800 年代後半になると MK 村にキリスト教の伝道者たちが居住した影響があり、イスラームを信仰していた多くの村民がキリスト教に改宗したとのことである。なお、キリスト教に改宗した人々は、継承されてきた土着信仰を否定している。

MK 村には、小学校、中学校、病院、常設市場、定期市、井戸が存在し、ボンデイの居住地の中心地の一つとなった。よって、MK 村は多くの人が集う場所となっている。そのため MK 村にはボンデイの人々のみならず、婚姻もしくは出稼ぎできたサンバー、ジグア、マコンデ¹の人々など、他民族も居住している。

3. ボンデイ語の言語使用

3.1. 使用状況

2003 年にアンケートを使用した聞き取り調査（高村 2005a）と、2018 年までの MK 村での滞在で行った参与観察のボンデイ語使用状況の結果を記述しておく。聞き取り調査は、合計 174 名の村人を対象に実施した。年齢層は、若年層は 15～29 歳（46 名）、中年層は 30～49 歳（68 名）、高年層は 50 歳以上（60 名）とし、家庭外と家庭内における言語使用の結果をまとめておく。また、2018 年までの参与観察においては、言語使用の性差を簡潔に

¹ タンザニア南部に居住する民族

記述する。

3.1.1. 家庭外（MK 村の村内と近隣の街）

村では、市場、教会、モスクなどの公共の場において、高年層の 20～40% 半数程度がボンデイ語を使用するが、それ以外はスワヒリ語を使用している。

街では、市場、教会・モスクなどでは、ボンデイ同士との会話を除いて、いかなる場所でもスワヒリ語を使用している。

3.1.2. 家庭内

世代による言語使用の結果は、以下の通りとなった。

高年層は、祖父母および両親に対し、8 割以上の人がボンデイ語を使用している。同世代である兄弟・配偶者に対しては、4～6 割がボンデイ語を使用し、子供に対しては 3 割となる。

中年層は、祖父母および両親に対し、3～4 割がボンデイ語を使用している。同世代の兄弟と配偶者、また下の世代の子供に対しては、殆どがスワヒリ語を使用している。

若年層は、約 1 割のみが祖父母および両親に対しボンデイ語を使用しているのみで、ほぼスワヒリ語を使用している。

家庭内の言語使用を調べた結果、家庭内でさえ徐々にボンデイ語の使用が減少していることが明らかである。

3.1.3. ボンデイ語使用の男女の差

女性のボンデイ語使用に関しては、30 代以上の女性だけの集まりの際、ボンデイ語を使用する傾向にある。既婚女性のための集まりである結婚式の前夜祭の中で、婚姻の祝いと子宝を祈る歌はボンデイ語の歌であった。葬式の準備、常設市場での会話、実家の母との会話では、ボンデイ語を使用している様子を確認した。例えば、日常的に常設市場で食料を販売している女性たちは、お互いにボンデイ語で話している（高村 2018）。30 代以上の女性のための集まりでは、ボンデイ語を使用する機会もあり、そこでボンデイ語が女性たちの間で保存されているということが伺える。

男性のボンデイ語使用に関しては、村の会合の場において 60 代以上の男性がボンデイ語を使用していた。しかし、多くの男性は、都市で就労や商売を行っているため、より他

民族との接触の時間が多く、村での滞在時間が少ない。そのため、都市に滞在していた 50 代以上の男性は、ボンデイ語を理解できるが自ら話すことは困難になっている状況であった。

女性と男性のボンデイ語使用の結果をまとめると、言語使用には性差があることがいえる。生活様式を見ても、ボンデイの女性は日常的に村内のみで暮らしているが、男性は日常的に都市や地方に働きに出ている。ボンデイ語使用の男女差は、この就労体制および時間の過ごし方の違いが、言語使用に影響を及ぼしているといえる。

3.1.4. ボンデイ語使用状況のまとめ

現在、家庭外でボンデイ語の使用を確認できるのは、①高齢者同士の会話、②女性たちのみが参加する結婚式前夜祭の儀式、③常設市場で食材などを販売する女性たちの会話の 3 点のみである。

ボンデイの女性たちは村を出ることが少なく、村内のみで商売を行い、また儀礼遂行の際には共同作業することが多い。その結果、男性よりボンデイ語を話すことができる人が多いことが分かった。他民族の女性が嫁としてボンデイの村に居住した場合、嫁たちはボンデイ語が話せなくても理解できるようにはなっている。この状況は、ボンデイ語話者が増加する可能性の期待は高まる。しかし、ボンデイ語を使う機会の多い女性たちでさえ、子育ての際には、子供の就学に備えてスワヒリ語で話しかけているのが現実である。

先述したが、サンバーとジグア、そしてボンデイは、各々が各自の言語を使用しても理解は可能であると、それぞれの民族の長老たちは語っている。しかし、ボンデイの長老たちは、「サンバーとジグアの言語は積極的に使用されているが、ボンデイの言語はこれらの 2 言語より使用されることなく、且つ文化も継承されていない」と主張している。語彙も 70% 程類似していると言われていることから、サンバーとジグアの言語および文化が継承しているならば、ボンデイを含めた 3 民族の「核」となる文化も継承される可能性はある。しかし村の長老たちは、ボンデイの民族性はサンバーおよびジグアの民族性とは類似性はあるが異なると主張し、現在もボンデイ文化の衰退を危惧している。

3.2. ボンデイ語に関する人々の意見

ボンデイ語に対する肯定的意見では、①母語・民族・実家の言葉、②秘密が守れる言葉、③民族内での伝達方法、④民族の文化を作るなど、ボンデイにとっては必要な言語である

という認識がある（高村 2006）。

ボンデイ語を使用しない理由には、大別して2点ある。一点目は、多民族が集う場、例えば学校、信仰の場、市場、公共施設等ではスワヒリ語が必要であり、特に仕事の間では、ボンデイ語では商談が不可能であるとボンデイの商売人は語っていた。二点目は、ボンデイ語は田舎くさい、という理由であった（高村 2006）。

このようにボンデイ語の使用が衰退してくると、人々のボンデイ文化に対する意識にも変化が起こっていた。①ボンデイの文化への軽視、②継承されてきた儀礼への軽視、③ボンデイのことわざや物語などの口頭文芸への無関心、④アイデンティティの変化で、タンザニア人であると自称する人が出始めている。

このような人々のボンデイ文化に対する意識変化の要因は、イスラームとキリスト教の外来宗教の影響も絡んでいるであろうが、ボンデイ語使用の衰退は大きな要因の一つになっていることは確かである。

ほとんどのボンデイの人々がそうであるように、長老たちも、ボンデイ語が日常生活において「重要でなくなってきた」ことは認識している。その一方で老たちは、民族語を失うことでボンデイに伝わってきた伝統を失わせてはいけなく考えている。その理由には、民族語と文化は自己アイデンティティの認識に重要である点を挙げていた。そのほかには、近隣の他民族の言語と比較するとボンデイの言語は近隣の言語ほど使用されていない点を挙げていた。

4. ボンデイ語復興への試み

4.1. 個人的な復興への思いと村民による伝統維持の試み

上記の通り、ボンデイ語は「必要」であるという意見は多くはない。若者がボンデイ語の必要性を認識していないため、ボンデイ語の復興に対する活動は、長老たちのみによって構成されている。日常的な取り組みは、ボンデイ語の普及のために家庭内で可能な限りボンデイ語で話すことにしている、といったような小さな取り組みである。

グループでの取り組みとしては、近年演奏されなくなったボンデイの男性が継承してきた音楽の復活を計画し、2014年から取り組みが開始された。この音楽復興活動メンバーは、長老の男性のみで構成され、若者は含まれていないのが現状である。

4.2. 行政による民族文化の復興

タンザニアの行政が民族文化の復興事業を実施した。ボンデイの文化も対象となり、2017 年政府指導のもと各民族の文化を紹介するイベントが開催され、ボンデイの郷土料理や踊りと太鼓演奏が披露された。イベント用の T シャツまで作製され、大いに盛り上がったと聞いている。

当イベントの宣伝用映像が作成され、MK 村においてインタビューが行われた。インタビュー対象者は、男性のみが奏でることができる伝統音楽の演奏者と女性のみが参加できる結婚前夜祭の歌い手・踊り手であった。長老たちに対するインタビューでは、長老たちは、ボンデイの言葉と文化が消滅しようとしている、と主張していた。

この民族文化復興の取り組みのターゲットは、地元もしくは地方に居住している全ボンデイの人びとであると考えられるが、このイベントが若い世代に影響を与えたかどうかは確認することはできない。一方、イベントに参加した演出者たちの多くは高齢者で、当イベントに情熱を費やしたとのことであった。

4.3. 新たな試み SNS

近年、ボンデイの人々が住む農村の生活様式が変化してきた。人々がスマートフォンを使用するようになり、且つ、SNS を好んで活用するようになった点である。MK 村には、電気がある家庭はまだ 1/3 程度であるため、筆者はスマートフォンの普及は、まだまだ先の事かと想像していた。

農村での携帯電話所有事情は、次のとおりである。2～3 年前までは、通話専用の携帯電話が主流であった。電気を通していない家庭の通話専用携帯電話所有者は、充電電池のみを充電店に渡し、金銭を払って充電をしてもらっている。しかし、2017 年ごろから、家庭に電気が通っている人がスマートフォンを所有しだした。まだスマートフォン所有者の人数は限られるが、それでも農村にも広がりを見せている。さらには、携帯電話の某会社のアクセス拠点となる電波塔が MK 村に建設された。それ以前は電波状況が悪く、電波の良い場所を探す必要があったが、現在は部屋の中にも電話ができるようになった。また、2015 年ごろまでは、村でインターネットに接続することができなかったが、近年は村でも接続できるようになった。

その後、スマートフォンを所有している村民が SNS を活用し、ボンデイ語・ボンデイの文化を紹介しはじめ、ボンデイの言語と文化の普及へと動き出した。

そのきっかけが、「wabondei familia group (wfg) (ボンデイ・ファミリー・グループ)」という名で設立されたメンバーのみ公開のグループのフェイスブックサイトである。2020年9月時点でのメンバーの人数は、4,000人以上である。管理者は、ボンデイの民族の説明も記載し、2020年9月に「Misemo ya Wabondei (ボンデイの格言)」という本を出版したと投稿もしている。筆者はMK村における調査協力者を通して、管理者に連絡を試みた。管理者は都市に住んでいるボンデイであり、ボンデイの言語をはじめ、文化が衰退していることに気づき、フェイスブックでグループを立ち上げた。

当グループのメンバーの中には、いつも使用しないボンデイ語をわざわざ駆使して投稿し、またはボンデイに伝承されてきたことわざを投稿している人もいる。例えば、ある男性は、ボンデイ語のことわざとその意味をボンデイ語で記述し、グループのサイトに投稿していた。それに対して、ボンデイの若者たちがボンデイ語で男性の投稿にメッセージを送っている。ことわざに反応している若者たちは、日常的にボンデイ語を積極的に使用していないが、フェイスブック上では自分の民族を自負し、自分の民族を再確認するかのように、ことわざに対して簡単な意見をボンデイ語で述べていた。なお、当サイトはボンデイの文化紹介の投稿のみを許可しており、個人的な利益目的および宗教的な内容の投稿は禁止している。

4.3.1. ことわざの投稿

Wabondei familia group(wfg)へのボンデイ語によるボンデイのことわざの投稿を確認することができた。投稿されたことわざとグループメンバーからの反応を一部紹介する。

2019/1/15 Seubwaza nyumba yako yagwa, ikeni igwe nna akii yangu

あなたはいくら教えてもらっても、私のことを全くわかってくれない

いいね 13、コメント 4

2019/1/17 Zanga zalala.Ubwanga wa tatiako na undee wa mamiako kuuona?

お父さんお母さんに、生まれる前に会ったことあるのか？

いいね 10、コメント 2

2019/1/18 Heku diawia mwe ungo

結婚式には必ず必要なものを揃えないといけない

いいね 8、コメント 8

2019/1/19 Tindi dihoswa ni uvyazi

危険にさらされるバナナの木は実をつけた親

いいね 5、コメン 6

2019/1/19 Masukuzi nee miti

苗こそが木

いいね 4、コメント 2

2019/1/19 Ukamba tadani, wezio wamba tada nani

あなたは「食べよう」と言い、友人は「誰と食べるのか」と言う

いいね 3、コメント 3

2019/1/20 Chendacho nasi nkachefisa

我々と共に行動するモノは隠れない

いいね 4、コメント 2

2019/1/20 Mbigizi npya itungua ya kae

新しい棒はとっくに下に降ろされていた

いいね 4、コメント 0

2019/1/20 Chekao chedi chamanywa ntako

座り心地のよい場所はお尻が知っている

いいね 7、コメント 3

2019/1/21 Kifumba kikanyiiwa ni mwana nkakisengwa

手の平は子供がおもらししても切り落とされることはない

いいね 6、コメント 6

2019/1/21 Hosa koo kaya ni mazitui

矢の実家は森

いいね 9、コメント 2

このように、あるボンデイの人が「wabondei familia group (wfg)」にボンデイ語で投稿したボンデイのことわざに対し、ボンデイの若者たちが「いいね」と反応し、コメントメッセージを送っている。各ことわざに対するコメント内容は、「その通りだ」とか、「これこそがボンデイだ!」、もしくは類似した別のことわざを投稿し、同意を示すかのようにさらにことわざに対する強調表現を示していた。これまでの調査により、ことわざに対する関

心はほぼないという結果が表れていたが、少人数ではあるが、ボンデイのことわざの知識を持ち、かつ関心を持っていると言えそうである。

4.3.2. ボンデイの食文化紹介の投稿

ことわざの他には、食文化の紹介の投稿が多い。例えば、郷土料理カンデ Nkande の紹介である。食文化の紹介には写真も投稿されわかりやすく掲載されている。

例：ムスunga musunga	苦菜
ゴグウェ gogwe	苦ナス
ナス bilinganya	ナス
バミヤ bamia	オクラ
パンパ pampa	塩漬けされた乾燥サメ
バダ badha	キャッサバの粉で作ったウガリ
プレ pure	豆とトウモロコシのココナッツ煮
おかずの味付けは、ココナッツミルク	

郷土料理の紹介に関しては、毎日のようにグループメンバーが投稿をしている。料理のみだけでなく、換金作物であるオレンジ農場の様子や主食であるトウモロコシ栽培・収穫の様子などの紹介もされている。食文化の中でも特に、苦菜のムスunga msunga、乾燥サメのパンパ pampa、キャッサバウガリのバダ badha は代表的なボンデイの食文化であり、頻繁に登場している。

食文化紹介の投稿者は、主に若者である。ボンデイの食文化の紹介であることからボンデイ語で記載されているが、流ちょうなボンデイ語ではないことは確認できる。

4.4. まとめ

新しいコミュニケーションツールである SNS の登場により、ことわざを投稿したり、投稿されたことわざに反応したり、食文化紹介を投稿するなど、ボンデイという自民族を積極的にかつ意識的に紹介していることが確認できた。また、日常的にはボンデイ語を積極的に使用していないが投稿者が、フェイスブック上ではボンデイ語を積極的に使用している様子が伺えた。

これまでの調査では、今後のボンデイ語の使用は消えていく方向に向かっていくと予想できる結果であった。その主な理由は、ボンデイ語を使っても①タンザニア人他民族とコ

コミュニケーションがとれない、②教育、仕事に使用できない、③田舎者と思われる、などであった。言語使用の衰退に伴ってボンデイ文化に対する人々の態度に変化が生じ、①ボンデイの文化への軽視、②継承されてきた儀礼への軽視、③ボンデイのことわざや物語などの口頭文芸に対して無関心、④アイデンティティの変化、など否定的な側面が主に語られていた。しかし、スマートフォンおよび SNS という新しい技術に感化され、故郷を懐かしむ都市居住のボンデイのみならず、これまで無関心でボンデイの文化を軽視してきた地元に住む若者が、わざわざボンデイ語を使用し、ボンデイの食文化を紹介し、ボンデイのことわざを投稿し、それらに同感の意を表し、民族意識が再確認されはじめたことが明らかになった。

5. 考察 SNS と文化復興

筆者は長期にわたり言語の衰退状況を観察してきたが、近年 SNS の登場で、その状況が突然変化してきたことが明らかになった。ボンデイの若い話者たちは民族語を残したいとは思ってはならず、また継承されてきた文化に対する興味も失っていたが、近代技術の広まりが彼らに民族の言語および文化を見直すという行為を起こさせたことになる。

ボンデイの場合、都市に居住する一人の男性が自民族の意識に目覚め、SNS 上でコミュニティを構築し、これまで興味のなかった若者を巻き込みながら、ボンデイの民族意識を高めている。この新しい手法は若い世代にボンデイ語および文化に対する関心を高めさせ、その結果、文化復興へと展開する可能性がありそうである。

参考文献

- 奥野みさ. 2006. 「英語とアイデンティティ」『多民族社会の言語政治学』 pp.93-135. ひつじ書房.
- 孫宏開. 2010. 「中国における少数言語の活力の度合い」パトリック・ハインリッヒ、松尾慎（編）『東アジアにおける言語復興』 pp.17-30. 三元社.
- 高村美也子. 2005a. 「タンザニアの民族語ボンデイ語から見る多言語状況と生活文化の動態」梶茂樹、石井溥（編）『アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態』 pp.115-130. 美功社.
- . 2005b. 「タンザニア・タンガ州 ボンデイ族における生活とことわざ — 消滅傾向にある民族語とことわざの現状から — 」『スワヒリ&アフリカ研究』 15, pp.57-66.

- _____ 2006.「スワヒリ語圏 ボンデイ族のことわざに関する言語人類学的研究」
名古屋大学提出修士論文.
- _____ 2013.『スワヒリ農村ボンデイ社会におけるココヤシ文化』アフロ・ユーラシ
ア内陸乾燥地文明研究叢書第 11、名古屋大学文学研究科.
- ブラッドリー, デービット. 2010.「意識をいかに変え、危機言語をいかに維持するか」『東
アジアにおける言語復興』pp.31-48. 三元社.
- Bradley, David 2010, “Resilience in Language Endangerment”, *Rovue Roumaine de Linguistique*,
LV, 2, pp.143-160.
- Kiango, John 2008, “Kibondei: Msamiati wa Kibondei - Kiswahili - Kingereza” *Lot Publications:*
Lexicon Series, 19, University of Dar Es Salaam.
- Nkondokaya, V.G. 2003, *Asili ya Waseuta*, Peramiho Printing Press.
- Woodward, H.W. 1882, *Collections for a Handbook of the Bondei Language*, London: Society for
promoting Christian knowledge.

資料

The United Republic of Tanzania 2013, *2012 Population and Housing Census*, Population
Distribution by Administrative Areas, National Bureau of Statistics Ministry of Finance
Dar es Salaam and Office of Chief Government Statistician President’s Office, Finance,
Economy and Development Planning Zanzibar.

インターネット資料

公益財団法人アイヌ民族文化財団

<https://www.ff-ainu.or.jp/> (2020 年 9 月 21 日閲覧)

高村美也子 2018「今なお主流な対面式コミュニケーション [エッセイ 01: ここだけの話
No.1] 南山大学人類学研究所 <http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/essay/011748.html>

Ethnologue Language of Tanzania, “Bondei”

<https://www.ethnologue.com/language/bou> (2020 年 11 月 10 日閲覧)

wabondei familia group (wfg.)

<https://www.facebook.com/groups/> (2020 年 11 月 20 日閲覧)